かささぎ通信　第133号

毎月第2金曜日 13：30～15：30　　2024年　2月　9日　発行
刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

２０２４年１月の「森三郎の作品を読む会」では、「雉子（きじ）のお山」（『雪こんこんお寺の柿の木』１９４３年１２月）と「パチンコ」（『赤い鳥』１９３３年５月号所収作）を読みました。

「雉子のお山」はお母さん雉子と三羽の子どもの雉子の話です。お母さん雉子は「おとなしくしないと長兵衛をよんできますよ」と言って、子どもの雉子たちをおとなしくさせます。「長兵衛」というのは鉄砲を持って山へやってきて、ズドンとぶっ放すこわい人間のことです。そのうちに山の桜の木が満開になると、お大名のお姫様一行がお花見にやって来ました。お姫様は「雉子のお山」にいる雉子の鳴き声を聞きたいと思っていましたが、雉子たちは姿を見ません。子雉子たちは初めて見る人間というものを、あれがこわい「長兵衛」なのかと不安になります。お姫様の方も雉子たちが物陰でそっと出す声がこわくて早々に山を後にしました。

この話の中で興味深いのは童歌です。お母さんは「長兵衛」のことを説明する時、こんな歌を歌います。

向かふとほるは長兵衛じゃないか／鉄砲かついで犬つれて／雉子のお山へ雉子うちに／雉子はけんけんほろろうつ

国立国会図書館デジタルコレクションで検索すると、このような「向う通るは〇〇じゃないか、・・・雉のお山へ雉うちに」という語が入った童歌は全国に散らばっていることが分かります。諏訪の民謡にはその名も「長兵衛」でほぼ似た歌がありました。またお姫様が歌う手まり歌にも広島県や宮崎県の手まり歌に、似通った歌詞が見られます。

向かふのお山に鹿が鳴く／暑くて泣くか寒くてか／暑くも寒くもないけれど／九十九人の狩人が／九十九谷をとりまいて／親子もろとも打つわいの

子雉子たちはこのような童歌から「人間」の恐ろしさを知り、身を守ることを覚えていくのでしょう。『赤い鳥』時代の「かささぎ物語」(1931.12) も「向うとほりやる鹿鷺長者の、肩にかけたる、かたびら」と、同じような詞で始まる童歌で、作品のテーマを示していました。

『赤い鳥』掲載作「パチンコ」は、子どもたちが雀を打ったりする時に使うおもちゃのパチンコをタイトルにしています。人の目に当たったりして危ないから、民男のクラスでは使ってはいけないことになっていました。ある日、高松君が持ってきていたパチンコが無くなってしまいます。成績が良いからか、高松君の行為自体は不問になっています。お昼休みに一人で教室にいたのを見られた武ちゃんが、みんなから疑われます。武ちゃんは「ぼくは人のものなんかに手をつけない」と真っ赤な顔をして自分の上着のポケットを見せたり、「先生に言って、みんなのカバンを調べてもらえばいいじゃないか」と言ったりします。ところが家に帰って民男がカバンをあけると、あるはずのないパチンコが入っているのです。民男は「ははあ、武造のやつがぼくを泥棒にしようと思ってやったのだな」と決め込みます。それというのも民男と武ちゃんは二人用の机の隣り同士の席ですが、普段から民男は武ちゃんの粗暴な行為がいやで、仲が悪かったからです。その後、民男と武ちゃんは一切口をきませんでしたが、四五日して武ちゃんは学校に来ないようになります。ある日、民男は氏神様の森の脇で赤ん坊を負ぶった武ちゃんに出会います。武ちゃんは拾っていた椎の実を民男に分けてくれます。

本文には民男のカバンにパチンコが入っていたのは武ちゃんの仕業だとは書いてありません。しかし武ちゃんの身なりや授業料をなかなか払えない家庭の事情から、民男に武ちゃんへの偏見があったことは分かります。民男は学校をやめて子守をしている武ちゃんを見て、あんなに憎らしく思ったことが恥ずかしくなります。武ちゃんの家では椎の実は大事な食糧だったのかもしれません。民男の立場、武ちゃんの立場で活発な感想が出ました。『森三郎童話選集』二冊には収録されていませんが、時代を超えて、今の子どもたちにも読んでもらいたい作品の一つです。

〈次回予定〉　２０２４年３月８日（金）午後一時半～三時半
・「鏡の渡」（『雪こんこんお寺の柿の木』１９４３．１２）
・「乳母」（『赤い鳥』１９３３．７）